都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 14，70−79頁，2012

◇研究ノート◇

# 社会的アイデンティティの多様性と調和性が精神的健康に与える影響

## ―― 大都市部大学生の場合 ――[1)]

田端　拓哉・向井　有理子・宮崎　弦太・池上　知子

◆要　旨

都市社会学の知見によれば，都市に暮らす人々は多様な社会的アイデンティティを持ちうることが推測される。本研究は，多様なアイデンティティをもつことが，個人の精神的健康にどのような影響を及ぼすかを，大都市部の大学生を対象に検討した。先行研究では，アイデンティティ相互の関係が調和的な関係にあれば，アイデンティティ数の増加は精神的健康を促進するが，葛藤を引き起こすような不調和な関係にあれば，逆に精神的健康が阻害されることが示されている。しかし，それがどのようなメカニズムによって支えられているのかについては，まだ不明な点が残されている。本研究では，自己複雑性理論の観点から，多くのアイデンティティをもつことは，自己の諸側面が相互に分化し数が増えることであるととらえ，その結果，ネガティブな事象に対する精神的回復力（レジリエンス）が高められるのではないかと考えた。自己複雑性が高ければ，ネガティブな出来事によって自己のある側面が傷ついても，その影響が自己の他の側面に波及しにくく，残された側面の資源を動員することによって困難に対処しやすくなると考えられるからである。ただし，それはアイデンティティ相互の関係が葛藤を起こすことのない調和的な場合に限られる。189 名の大学生が質問紙調査に参加した。調査の結果，主要なアイデンティティ相互の関係が調和的であれば，アイデンティティ数の増加はレジリエンスを高めるが，不調和であれば，アイデンティティ数の増加は，レジリエンスを低下させることが示された。主観的幸福感は，アイデンティティ数と調和性によって影響を受けることはなかった。したがって，アイデンティティの数が増えれば，幸福感が高められ精神的健康が促進されるという単純な関係にあるのではなく，アイデンティティ数の増加は，ネガティブな事象の影響を緩和し精神的健康の悪化を予防するといった間接的なプロセスによって精神的健康の維持に寄与しているのかもしれない。最後に，都市的環境と精神的健康の関係に関する研究の今後の方向性について言及した。

**キーワード**：社会的アイデンティティ，自己複雑性，主観的幸福感，レジリエンス，都市的環境

（2011 年 9 月 13 日論文受理，2011 年 11 月 4 日採録決定 『都市文化研究』編集委員会）

## はじめに

人はさまざまな集団に所属し，それぞれにおいて役割をもっていることが一般的である。それらは，多かれ少なかれ自己を構成する重要な要素となる。このように集団所属性や役割関係によって規定される自己概念を社会的アイデンティティという（cf. Baumeister, 1986）。本研究では，大都市という環境を，個人が多様な社会的アイデンティティをもつことを可能にしやすい環境であるととらえ，そのような都市的心性が個人の精神的健康にどのように影響するかを検討することを目的とする。

## 都市的環境と社会的アイデンティティの多様化

都市の特徴はさまざまなものが考えられるが，人口が多く密集している，異質な人間が混在しているといった

点は，広く認められているところであろう（Wirth, 1938; 岩田，1995）。フィッシャーは，このような都市の生態学的特徴が，多種多様な下位文化を生み出し，それら相互の衝突や交流を引き起こすことによって，伝統や通念にとらわれない革新的な文化の創造を促すとする下位文化理論を提唱した（Fischer, 1975; 1978 奥田・広田訳 1983）。下位文化理論によれば，各下位文化集団は，特定の職業に従事する人たちの集団，ある種の政治的信念によって結びついているグループ，現代美術を愛好する人たちの集まりといったように，都市度が高くなるほど，ごく少数の人々にしか共有されない特定の価値観や信念，趣味や嗜好に基づいて構成されるようになり，それら共通する側面においては極めて同質性の高い集団となりやすい。一方，このように領域や専門性によって細分化された多種多様な集団が存在することは，個人の側にとっては，選択肢が広がるだけでなく，複数の集団に同時に所属することを可能にする。たとえば，ある一人の女性が，家庭にあっては妻と母親の役割を果たしながら，家庭の外では環境問題に取り組むNPOのメンバーとして活動し，テニス・クラブの会員でもあるといったことは特別珍しいことではないだろう。そして，都市ではそのようなことがより一層容易になるであろう。かつて，ジェームズが述べたように，人間は，元来，さまざまな側面（職業人としての自己，家庭人としての自己など）を持ちうる存在であり（James, 1890），下位文化理論の想定する都市的環境下では，自己の種々の側面ごとに，価値を共有し活動を共にする相手や仲間を選択しやすいと考えられるからである。事実，フィッシャー（Fischer, 1982 松本・前田訳 2002）は，下位文化理論を構築する過程で，都市に暮らす個人が取り結ぶ人間関係（パーソナルネットワーク）の重要な特徴として選択性の高さを指摘している。

わが国においても，フィッシャーの提起した下位文化理論に基づく都市的人間関係論もしくは対人ネットワーク論を，日本の文脈に置き換えて検証する試みが数多くなされている。そのなかで，本研究とかかわりの深いものとして，大谷（1995a, 1995b, 2007）による一連の研究がある。彼は，対人ネットワークの構造を「単一送信性」と「多重送信性」という概念によって対比的にとらえることを論じた社会人類学者のメイヤー（Mayer, 1961）の主張を敷衍し，都市住民の形成するパーソナル・ネットワークは，単一送信的になりやすいことを明らかにしている。「単一送信性」とは，異なる目的に応じてそれぞれ異なる人々と関係を取り結ぶ傾向を指し，対して「多重送信性」とは，同じ人とさまざまな場面で異なる目的をもって関係を持つ傾向を指す。したがって，単一送信的傾向が強い者は，性質の異なる複数の社会的ネットワークに同時に所属していることになりやすい。社会的ネットワークへの所属は，冒頭で述べた集団への所属や役割関係の形成を意味することから，単一送信的であるほど，社会的アイデンティティの多様化をもたらし，自己をさまざま側面に分化させる可能性が大きくなる。

大谷（1995b）は，大都市（圏内）と地方都市の大学生を対象に調査を行い，興味深い知見を得ている。それによれば，大都市圏の大学生は，学校生活圏，アルバイト生活圏，自宅生活圏が明確に異なっていたが，地方都市の大学生の場合，それらは一体化していた。大都市圏の大学生は，交通の便が良いことから短時間で長距離を移動することが可能なため，生活圏が拡大しやすく多様化しやすいといえる。また，大都市圏内にある大学は，交通の利便性により，大学が位置する同一県内だけでなく近隣の他府県からの入学者の割合が高く，出身地域や出身高校の異なる学生が混在していた。地方都市の大学は，出身地域や出身高校が同じ学生の割合が高かった。このような地域性の違いは，両者の友人ネットワークの形成過程にも影響していた。地方都市の大学生は，入学の前と後，学内と学外で形成される友人ネットワークの重複度が高いのに対して，大都市圏の大学の学生はそれらの重複度が低く，活動や目的に応じて付き合う相手を変える単一送信的特徴が顕著に認められている。

このように大都市という環境は，そこに暮らす人々のパーソナル・ネットワークを単一送信化させやすいことから，社会的アイデンティティの多様性を増大させる可能性を潜在させているといえる。

## 社会的アイデンティティの多様化と精神的健康

では，都市的環境がもたらしうる社会的アイデンティティの多様化は，個人の精神的健康にどのような影響を及ぼすであろうか。この点については，社会心理学や健康心理学において研究が重ねられているが，社会的アイデンティティの数の増大がもたらす精神的健康への影響に関する見解は必ずしも一貫していない。

複数の社会的アイデンティティを持つことは，自己の多面性を表す自己複雑性を高めるため，自己のある側面に関係する領域でのネガティブな事象の影響が自己全体に波及することを防止するという考え方がある（Linville, 1987）。たとえば，Linville（1987）は，自己複雑性が抑うつやインフルエンザの発症といったストレスがもたらす心身への悪影響を緩和しうることを示している。また，本邦でも，自己の肯定的な側面の自己複雑性の高さが抑うつ傾向を抑制することが報告されている（義田・中村，2007; 佐藤，1999）。また，Koch and Shepperd（2004）は，自己複雑性と否定的なライフイベントの悪

影響の関係を検討した研究をレビューし，研究結果は必ずしも一貫していないが，それは自己複雑性の定義や測定方法が研究者によって異なるためであり，その点を勘案すれば，少なくとも肯定的な側面についての自己複雑性の高さは否定的なライフイベントの悪影響を緩衝すると結論しうると述べている。したがって，社会的アイデンティティの数の多さは，自己複雑性を高めることを通して，ネガティブな事象の影響を緩衝すると考えられる。

他方，複数の社会的アイデンティティを持つことは，役割葛藤や役割過負荷を引き起こし，うつ傾向を高めるなど精神的健康を損なうと主張する論者もいる（e.g., Coverman, 1989; Woolfolk, Novalany, Gara, Allen, & Polino, 1995）。Bolger, DeLongis, Kessler, and Wethington（1989）は夫婦関係における職場と家庭でのストレスについて調査し，仕事のストレスが家庭で緩和されるという補償関係がみられる反面，家庭のストレスが職場のストレスを高めることを示している。本邦でも，土肥・広沢・田中（1990）が女性について検討を行った結果，就業者，妻，母と 3 つの役割をもつ女性は，就業者としての役割しかもたない女性よりも生活満足感が高い一方で，役割過負荷感は，役割が就業者か妻・母のいずれかのみの女性よりも高いことを示している。役割の多さは社会的アイデンティティの多さととらえられることから，これらの結果は，多様な社会的アイデンティティをもつこと自体が，精神的健康を損なうリスクをはらむものであることを示唆している。

以上から，複数の社会的アイデンティティをもつことが精神的健康に利する場合もあれば，それを損なう場合もあることが示唆される。このような状況を踏まえ，Brook, Garcia, and Fleming（2008）は，社会的アイデンティティ相互の調和性に注目することにより，これら相反する知見を統合的に理解する枠組みを提起した。彼らは，大学生を対象に質問紙調査を行い，回答者に自分にとって重要な所属集団や役割関係を複数列記させ，それらがどのくらい相互に調和しているかを評定するよう求めた。精神的健康の指標には，幸福感の高さ，抑うつ・不安・ストレスの低さを使用している。その結果，個人にとって重要な社会的アイデンティティが相互に矛盾することなく調和的関係にあるときは，アイデンティティ数の増加は，精神的健康を高めるが，相互に阻害しあうような不調和な関係にあるときは，アイデンティティ数の増加は，精神的健康を低下させることを明らかにした。そして，相互に不調和なアイデンティティをもつことが精神的健康に悪影響を与える理由について，自己不一致理論（Higgins, 1987）の観点から，義務自己と現実自己の乖離に起因するネガティブな情動（罪悪感，自己嫌悪）が心的資源を枯渇させるからだと説明している。これは多くの役割を担うとどの役割も十分に遂行することが困難になることを意味している。一方，アイデンティティが相互に調和していれば，それらは心的資源の供給源となり精神的健康の維持に資すると述べている。ある集団で期待される役割行動が，別の集団のそれと類似していれば，前者で培った資質を後者で生かすことができるからである。

ただ，Brook et al.（2008）の説明は，自己複雑性と精神的健康の関係をめぐる議論が十分考慮されていない。精神的健康の維持には，ネガティブな出来事により自己がダメージを受けることがあっても，そこから立ち直れる精神的回復力（レジリエンス：resilience）を備えているか否かが重要な要因となる。先述したように，自己複雑性理論からは，さまざまな自己の側面をもつことは，ネガティブな出来事への耐性や対処能力を高めるという利点をもたらすと推察される（Linville, 1985; Rothermund & Meiniger, 2004）。Linville（1985）によれば，自己複雑性が高い人は，自己のある側面がダメージを受けたとしても，その影響を自己の一部に止めるのみならず，残された自己の側面によって，それを補償することができると考えられる。最近では，Rothermund and Meiniger（2004）が，自己複雑性の効果は，ネガティブな事象による影響の波及を単に防ぐことではなく，多くの自己の側面をもつことで，困難な場面を肯定的に再評価する枠組みが得られやすくなることであると論じている。否定的な気分が生起したとき，自己複雑性の高い人は，気分と反対の出来事を想起する傾向が強いという知見（榊, 2006）も，このような主張と符合している。さらに，Rafaeli and Hiller（2010）も，高い自己複雑性がストレスの影響を緩衝し，うつ状態に陥ることを抑止するのは，レジリエンスを増大させるからではないかと述べている。これらのことから，多様な社会的アイデンティティをもつことは，個人のレジリエンスを高めると予想できる。ただし，アイデンティティ相互の間に矛盾や葛藤による不調和があれば，心的資源の枯渇をもたらすため，アイデンティティの増加はレジリエンスの向上に寄与しないとも考えられる。このように，アイデンティティの多様性が精神的健康に寄与する過程においてレジリエンスの果たす役割は大きいと考えられるが，Brook et al.（2008）では，この点が検討されていない。

## 本研究の検討課題

本研究では，大谷（1995b）の知見を踏まえ，多様な社会的アイデンティティをもちうる環境下にいると考えられる大都市圏の大学の学生を対象に調査を行い，Brook et al.（2008）の知見の一般性を検証するとともに，自己複雑性理論から導かれる社会的アイデンティティ

の多様性とレジリエンスの関係を検討することとした。

ところで，Brook et al.（2008）は，精神的健康の指標として，適応感の積極的側面をとらえる主観的幸福感（subjective well-being）の高さと，不適応を来していないという消極的側面を反映した抑うつ・不安・ストレスの低さを合成した変数を使用していた。そのため，多様なアイデンティティをもつことが精神的健康の増進に寄与しているのか，精神的健康の悪化を防止することに寄与しているのか，あるいはその両方であるのかが明らかでない。特に，アイデンティティが相互に調和している場合は，予防的効果だけでなく，さまざまな役割を順調に遂行できることによる満足感や充実感の高揚といった積極的な効果も期待できよう。そこで，本研究では，まず精神的健康のより積極的な側面をとらえる主観的幸福感に注目して検討を行うこととした。そのうえで，予防的効果について，上述の議論に基づき，レジリエンスの高さを指標として検討することとした。レジリエンスの定義は，研究者によってさまざまで，必ずしも統一されているとは言い難いが（cf. Masten & Reed, 2005），本研究では，その目的に照らし，強いストレスを生じるような困難な状況に陥っても，そこから容易に立ち直ることを可能にする個人の特性としてとらえる。

また，Brook et al.（2008）は，回答者によって挙げられた社会的アイデンティティ（所属グループ，役割関係）すべてに対して，重要度と調和性を評価させていたが，調和性の要因がアイデンティティの多様性の効果を調整していたのは，アイデンティティの重要度が相対的に高い場合に限られていた。数あるアイデンティティの中でも個人にとって重要度の高い主要なアイデンティティが調和的であるかどうかが，大きな意味を持つのかもしれない。あるいは，自己の中核を構成する主要なアイデンティティが相互に調和していれば，その周囲に付加されるアイデンティティの数が増えることが，自己全体に好ましい帰結をもたらすとも考えられる。そこで本研究では，回答者にとって中核をなす主要なアイデンティティに焦点を当て，それらの関係の調和性如何によって，アイデンティティの総数が精神的健康にもたらす影響が調整されるかを検討することとした。

本研究の仮説は次のとおりである。

(1) 主要な社会的アイデンティティ相互の関係が調和的である場合は，多様なアイデンティティを持つことが，個人の主観的幸福感を高め，同時にストレスに対するレジリエンスを強化する。

(2) 主要な社会的アイデンティティが相互に矛盾や葛藤を引き起こすような不調和な関係にあるときは，多様なアイデンティティを持つことが，個人の主観的幸福感を低下させ，同時にストレスに対するレジリエンスを弱体化させる。

# 方法

## 調査参加者

大阪府下（吹田市，大東市）にある 2 つの私立大学の大学生 189 名（女性 118 名，男性 70 名，不明 1 名）が調査に参加した。平均年齢は 19.62 歳（*SD*=1.41）であった。これら 2 校の大学は，大都市大阪の近郊に位置しており，大谷（1995b）が調査対象とした大都市圏内にある大学（大阪府和泉市にある私立大学）と立地条件がきわめて類似していることから選定された。

## 手続き

大学の講義時間の一部を利用して質問紙調査を実施した。参加者には，まずフェイスシートで，学年，年齢，性別，出身地（1. 大阪市内，2. 大阪府内，3. その他，4. 日本以外）を回答してもらった。出身地の回答において「3. その他」を選択した参加者には出身都道府県名の記入を求めた。その後，社会的アイデンティティとして参加者が所属する集団名あるいは集団内での自分の役割，その重要性，それらの相互の調和性，そして主観的幸福感とレジリエンスを測定する尺度に回答してもらった（各尺度の詳細については後述）。なお，この質問紙調査では，愛着傾向，友人関係の単一―多重送信性，拒絶のサインへの感受性も測定しているが，本研究では分析に用いないため報告は割愛する。

調査全体の所要時間はおよそ 20 分であった。

# 測度

## 社会的アイデンティティの数，重要性，調和性

社会的アイデンティティについての各指標は Brook et al.（2008）に準ずる方法によって構成した。社会的アイデンティティの数は，回答者自身が重要視する所属集団（e.g., 家族，大学，アルバイト先）や，役割関係（e.g., A さんの恋人，B 家の長女，C 大学の学生）を，思いつく限り列記してもらうことによって求めた。

回答者が挙げた社会的アイデンティティの内でも特に重要な 3 つを回答者自身に選択してもらい，その 3 つそれぞれについて重要性と調和性の評価を求めた。重要性の評定項目は Brook et al.（2008）で使用された 4 項目を邦訳して用いた（e.g., このグループに所属していること/この役割をもっていることは私がもつ自分のイメージの重要な一部である）。それぞれの項目について 7 件法（1. まったくあてはまらない ～ 7. 非常にあてはまる）で回答を求めた。調和性の評定は，重要な 3 つのアイデンティティ相互の組合せについて評価を求めた。評

定項目は Brook et al.（2008）で使用された 3 つの項目対を邦訳して用いた（e.g.，1 つめの集団の一員であること/1 つめの役割は，2 つめの集団の一員であること/2 つめの役割にとっては問題がある―1 つめの集団の一員であること/1 つめの役割は，2 つめの集団の一員であること/2 つめの役割にも有益である）。それぞれの項目について，項目対のいずれのほうによりあてはまるかを 7 件法（1. 左によくあてはまる ～ 7. 右によくあてはまる）で回答を求めた。

### 主観的幸福感

伊藤・相良・池田・川浦（2003）によって開発された主観的幸福感尺度のなかから，本研究の目的に合う項目を選択し，それらを改変して作成した 5 項目に，独自に作成した 1 項目を加え，計 6 項目を使用した（i.e.，自分の人生は退屈だ［反転項目］；毎日の生活は充実している；将来のことが心配だ［反転項目］；自分の人生には意味がない［反転項目］；自分の人生が面白い；全体的に見て私は幸せだ）。それぞれの項目について 5 件法（1. まったくそう感じていない ～ 5. 非常にそう感じている）で回答を求めた。

### レジリエンス

長尾・芝崎・山崎（2008）が大学生のレジリエンスを測定するために作成した項目群のなかから，「自己調整」に関連する 5 項目（e.g.，人とトラブルがあったとき，自分自身で何らかの解決方法を考える）と「傷つきにくさ」に関連する 5 項目（e.g.，叱られて落ち込んでもしばらくすると回復する）を一部改変して使用することとした。ただし，「傷つきにくさ」に含まれていた 1 項目を除き，代わりに独自に作成した 1 項目（試験の成績が悪いといつまでも落ち込んだ気分が続く［反転項目］）を加えて，計 10 項目により尺度を構成した。それぞれの項目について 5 件法（1. まったくあてはまらない ～ 5. とてもあてはまる）で回答を求めた。

## 結果

### 調査対象者の出身地

調査対象者の出身地の構成を確認したところ，大阪府 78 名（内，大阪市内 16 名），大阪府以外の近畿圏の府県が 78 名，近畿圏外が 32 名，不明 1 名だった。回答者の 41.49%が大阪府内出身者，82.98%が近畿地方（2 府 5 県）出身者という構成は，大谷（1995b）が調査対象とした大都市圏内の大学（大阪府内の私立大学）の学生の出身地構成（大阪府 44.7%，近畿地方 76.9%）に近似していた。

### 尺度構成

レジリエンスと主観的幸福感の回答に不備が認められた 2 名のデータはそれらの尺度構成のための分析から除外した。

主観的幸福感を測定した 6 項目について信頼性分析を行ったところ，十分な信頼性が認められたため（$\alpha$＝.82），得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示すように反転項目の回答値を反転して 6 項目の平均値を算出し，主観的幸福感得点とした。

レジリエンスを測定した 10 項目について，下位尺度「傷つきにくさ」と「自己調整」それぞれに関連する 5 項目の信頼性分析を行った。その結果，「傷つきにくさ」は概ね十分な信頼性が得られたため（$\alpha$＝.70），得点が高いほど「傷つきにくさ」が高いことを示すように反転項目の回答値を反転して 5 項目の平均値を算出し，傷つきにくさ得点とした。しかし，「自己調整」については十分な信頼性が得られなかったため（$\alpha$＝.41），これ以降の分析を行わなかった。

社会的アイデンティティの数は，回答者の列記した項目から所属集団や役割を抽出して計数した（$min$＝3，$max$＝13）。ただし，社会的アイデンティティの調和性と重要性は 3 つの社会的アイデンティティについて回答を求めているため，アイデンティティ数が 3 未満の回答者はこれ以降の分析から除外した。なお，第一著者と第二著者が独立に計数したアイデンティティ数の一致率をみるため相関係数（Pearson の積率相関）を求めたところ，.97 ときわめて高い値が得られたので，第一著者の計数結果を分析に用いた。

アイデンティティ数が 3 未満であった者，社会的アイデンティティの重要性や調和性の回答に不備が認められた者，計 27 名を除いた 162 名（女性 106 名，男性 55 名，不明 1 名）のデータを用いて社会的アイデンティティの重要性と調和性の尺度の信頼性を検討した。回答者が選定した 3 つの重要な社会的アイデンティティそれぞれについて重要性 4 項目の信頼性分析を行ったところ，$\alpha$＝.80-.82 と十分に高い値が得られたため，得点が高いほど重要性が高いことを示すように反転項目の回答値を反転して各 4 項目の平均値を算出し，その平均値を重要性得点とした。

調和性 3 項目についても同様に信頼性分析を行ったところ，$\alpha$＝.62-.66 と概ね十分な信頼性を示す値が得られたため，各 3 項目の平均値を算出し，その平均値を調和性得点とした。得点が高いほど，調和性が高いことを示す。

### 予備的分析

予測の検証に用いる変数間の単純相関を算出した（表 1）。表 1 に示されるように，Brook et al.（2008）と

表 1. 各変数間の単純相関

| | *M* | *SD* | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1. ID数 | 6.46 | 2.00 | 1 | | | |
| 2. ID調和性 | 4.69 | 0.89 | .08 | 1 | | |
| 3. ID重要性 | 5.12 | 0.93 | .21 ** | .22 ** | 1 | |
| 4. 主観的幸福感 | 4.64 | 1.12 | .14 † | .14 † | .21 ** | 1 |
| 5. 傷つきにくさ | 2.89 | 0.80 | -.05 | -.10 | -.15 † | .29 *** |

*Note*:「ID」はアイデンティティ。***$p$<.001, **$p$<.01, † $p$<.10

同様に，社会的アイデンティティの調和性と重要性の間に有意な弱い正の相関が認められた。また，アイデンティティ数と重要性の間に，Brook et al.（2008）ではみられなかった有意な弱い正の相関が認められた。主観的幸福感はアイデンティティ数や調和性との間に有意傾向ではあるが弱い正の相関が示され，重要性との間には有意な弱い正の相関が認められた。一方，傷つきにくさは社会的アイデンティティの重要性との間に有意傾向ではあるが負の相関が示された。なお，主観的幸福感と傷つきにくさの間には有意なやや弱い正の相関が認められている。

## 仮説の検証

相関分析の結果，重要性と調和性，重要性とアイデンティティ数の間に弱い相関がみられたことから，仮説の検討に際しては重要性を統制変数として含めた。主観的幸福感得点を従属変数とし，アイデンティティ数，調和性，重要性（それぞれ平均値により中心化）およびそれらの交互作用を説明変数とする一般線形モデルによる分析を行った（表 2）。その結果，重要性の主効果のみが有意であり（$F$（1, 154）＝4.31, $p$＝.04），低重要性（平均値－1$SD$: $\hat{M}$＝4.44）の場合よりも高重要性（平均値＋1$SD$: $\hat{M}$＝4.83）の場合のほうが，幸福感の得点が高かった。アイデンティティ数と調和性の各主効果（順に $F$（1, 154）＝0.98, $p$＝.33; $F$（1, 154）＝0.09, $p$＝.76），

表 2. 主観的幸福感の GLM 分析結果

| 説明変数 | *F* | *p* |
|---|---|---|
| ID数 | 0.98 | |
| ID調和性 | 0.09 | |
| ID重要性 | 4.31 | * |
| ID数×ID調和性 | 0.68 | |
| ID数×ID重要性 | 0.30 | |
| ID調和性×ID重要性 | 0.86 | |
| ID数×ID調和性×ID重要性 | 2.46 | |

*Note*:「ID」はアイデンティティ。*$p$<.05

表 3. 傷つきにくさの GLM 分析結果

| 説明変数 | *F* | *p* |
|---|---|---|
| ID数 | 0.07 | |
| ID調和性 | 0.45 | |
| ID重要性 | 2.68 | |
| ID数×ID調和性 | 8.08 | ** |
| ID数×ID重要性 | 0.06 | |
| ID調和性×ID重要性 | 0.32 | |
| ID数×ID調和性×ID重要性 | 3.07 | † |

*Note*:「ID」はアイデンティティ。**$p$<.01, † $p$<.10

およびアイデンティティ数×調和性，アイデンティティ数×重要性，調和性×重要性，アイデンティティ数×調和性×重要性の各交互作用はいずれも有意ではなかった（順に $F$（1, 154）＝0.68, $p$＝.41; $F$（1, 154）＝0.30, $p$＝.58; $F$（1, 154）＝0.86, $p$＝.36; $F$（1, 154）＝2.46, $p$＝.12）。よって，主観的幸福感については，仮説 1 と 2 は支持されなかった。ただし，主要な 3 つのアイデンティティの重要性を高く評価している者ほど主観的幸福感が高いという予想外の結果が得られた。

次に，レジリエンスについて仮説を検討するため，傷つきにくさ得点を従属変数とし，アイデンティティ数，調和性，重要性（それぞれ平均値により中心化）およびそれらの交互作用を説明変数とする一般線形モデルによる分析を行った（表 3）。その結果，アイデンティティ数×調和性の 1 次の交互作用のみが有意となり（$F$（1, 154）＝8.08, $p$＝.005），アイデンティティ数×調和性×重要性の 2 次の交互作用は有意傾向にとどまった（$F$（1, 154）＝3.07, $p$＝.08）。アイデンティティ数，調和性，重要性の各主効果（順に $F$（1, 154）＝0.07, $p$＝.79; $F$（1, 154）＝0.45, $p$＝.50; $F$（1, 154）＝2.68, $p$＝.10），およびアイデンティティ数×重要性，調和性×重要性の各交互作用はいずれも有意ではなかった（順に $F$（1, 154）＝0.06, $p$＝.80; $F$（1, 154）＝0.32, $p$＝.57）。そこで，有意となったアイデンティティ数と調和性の交互作用について下位分析を行った。その結果を図 1 に図示する。

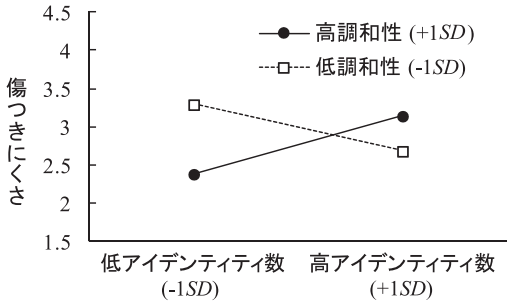


図 1. 傷つきにくさに対する調和性の±1$SD$ におけるアイデンティティ数の効果

下位分析の結果，まず，高調和性（平均値＋1*SD*）の場合のアイデンティティ数の単純主効果が有意であり（$F(1, 154)=4.50$, $p=.04$），アイデンティティ数が多い場合（平均値＋1*SD*; $\hat{M}=3.14$）のほうが，アイデンティティ数が少ない場合（平均値－1*SD*; $\hat{M}=2.38$）よりも傷つきにくさの得点が高くなることが示された。低調和性（平均値－1*SD*）の場合のアイデンティティ数の単純主効果は有意傾向であり（$F(1, 154)=3.43$, $p=.07$），アイデンティティ数が多い場合（平均値＋1*SD*; $\hat{M}=2.68$）のほうが，アイデンティティ数が少ない場合（平均値－1*SD*; $\hat{M}=3.29$）よりも傷つきにくさ得点が低くなる傾向にあることが示唆された。また，予想外であったが，アイデンティティ数が少ない場合（平均値－1*SD*）の調和性の単純主効果が有意であり（$F(1, 154)=7.02$, $p=.009$），低調和性の場合のほうが高調和性の場合よりも傷つきにくさ得点が高かった。アイデンティティ数が多い場合（平均値＋1*SD*）の調和性の単純主効果は有意ではなかった（$F(1, 154)=1.77$, $p=.19$）。したがって，レジリエンスについては，仮説 1，2 とも概ね支持されたといえる。ただし，今回の結果は，「傷つきにくさ」というレジリエンスを構成する一部の要素についてのみ得られた結果であることに留意する必要がある。また，予想外ではあったが，アイデンティティの総数が少ないとき，主要な 3 つのアイデンティティ相互の関係が調和しているより調和していないほうが，ストレスによって傷つきにくいという興味深い結果が認められた。これは調和的であることが常に好ましい帰結をもたらすわけではないことを示唆しているようであるが，レジリエンスの高い者ほど，相互に葛藤するような役割にコミットし続けることが可能であることを表しているとも考えられる。

## 考察

本研究では，都市社会学の知見（Fischer, 1975; 1978 奥田・広田訳 1983; 大谷，1995a，1995b，2007）からアイデンティティ数の増大をもたらしやすい環境にいると考えられる大都市部の大学生を対象に，多種多様な社会的アイデンティティをもつことが，個人の精神的健康にどのような影響をもたらすのかを検討した。アイデンティティの多様性と精神的健康の関係については，必ずしも見解は一致しておらず，アイデンティティの増大は精神的健康に好ましい影響を与えるとする知見と悪影響を及ぼすとする知見が混在している。これに対して，Brook et al.（2008）が，これら相反する知見を統合的に理解するための枠組みを提起し，アイデンティティ相互の関係が調和的であるか否かが重要な要因であると論じた。彼らの研究結果では，アイデンティティ相互の関係が調和的であるときは，アイデンティティ数の増加は精神的健康を高めるが，互いに葛藤を引き起こすような不調和な関係にあるときは，アイデンティティ数の増加は，精神的健康を低下させることが示されている。ただし，このような関係は，各アイデンティティの重要度が高い場合に限られていた。

ただ，Brook et al.（2008）の使用した精神的健康の指標では，適応感の積極的な側面を反映しているのか，消極的な側面（不適応な症状がないこと）を反映しているのかが不明であった。本研究では，適応感の積極的側面をとらえる主観的幸福感に焦点を当て検討した。しかしながら，仮説を支持する結果は得られず，社会的アイデンティティ数の増加は，それら相互の調和性の高低にかかわらず，主観的幸福感を高めることはなかった。したがって，多様なアイデンティティをもつことによって，必ずしも精神的健康が積極的に増進されるわけではないといえる。Brook et al.（2008）の結果は，アイデンティティ数の増加がうつや不安など不適応症状の顕在化を抑止することを示していたのかもしれない。もっとも，本研究では，Brook et al.（2008）と異なり，列挙されたすべてのアィデンティティ間の調和性を測定したわけではなく，主要な 3 つのアイデンティティに限定していたことが，結果に影響を与えた可能性は否定できない。

なお，主観的幸福感については，重要性の効果が認められ，主要なアイデンティティを自分にとって重要なものであると認知している者ほど，幸福感を強く感じていることが示された。重要性評価の高さは，集団成員性や役割関係に対する肯定的自己同一視の強さを反映しているとも考えられることから，主観的幸福感と関係が見られること自体は驚くべきことではないだろう。ただ，このような重要性の効果が Brook et al.（2008）では見出されず，今回見出されたのは，本研究での重要性評価が主要な 3 つのアイデンティティに限定されていたことによるかもしれない。いずれにせよ，この結果は，自己の中核をなす肯定的な社会的アイデンティティが人生における充実感や満足感の源泉となりうることを示唆している。

また，Brook et al.（2008）による説明は，アイデンティティ相互の関係が不調和であるときの役割葛藤や役割過負荷がもたらすリスクに重点が置かれており，自己複雑性とレジリエンスをめぐる議論が十分考慮されていなかった。自己複雑性理論に基づけば，自己が多様な側面に分化していれば，ネガティブな出来事によってある側面がダメージを受けても，その影響が自己全体に波及することを防止できるだけでなく，他の側面によってそれを補償し積極的に対処することも可能になると考えられる（Koch & Shepperd, 2004; Linville, 1985, 1987;

Rothermund & Meiniger, 2004)。すなわち，自己複雑性はレジリエンスを高める機能があるといえる（Rafaeli & Hiller, 2010)。社会的アイデンティティ数の増加は，自己複雑性の増大を意味することから，社会的アイデンティティ数の増加によってうつや不安など不適応症状が緩和されるとすれば，それはレジリエンスが高められたためと考えることも可能である。本研究の結果は，この考えを概ね支持するものであった。ただし，予想したようにアイデンティティ数の増加がレジリエンスを高めるように機能したのは，主要なアイデンティティ相互の関係が調和的な場合に限られていた。それら相互の関係が不調和であるときは，アイデンティティ数が増えると，どちらかというとレジリエンスが低下する傾向にあった。アイデンティティ相互の間に葛藤が生じやすく心的資源を枯渇させるような状況の下では，多種多様なアイデンティティをもつことが，レジリエンスを高めることにつながらないといえる。

ただし，本研究で分析されたレジリエンスは，ダメージを受けたときの回復しやすさを表す「傷つきにくさ」に限定されており，より能動的な問題解決力をとらえた「自己調整」については検討されていない。先述したように，レジリエンスという概念はかなり広範囲に及び，その内容も多岐にわたっている（cf. Masten & Reed, 2005)。今後は，より多面的なアプローチによってレジリエンスをとらえ検討する必要があるだろう。

加えて，本研究で使用したレジリエンス尺度は，ストレス度が比較的低い日常的な出来事に対する反応を測定していることも考慮する必要があろう。自己複雑性のもつストレス緩衝効果を検討した Brown and Rafeli（2007）は，自己の側面の数の多さがストレス軽減効果をもつのは，原因となる事象が比較的軽微で日常的な内容の場合であり，深刻で重大な出来事（e.g., 暴力事件，死別）に対しては，単に側面の数が多いだけでは効果をもたず，各側面同士の重なりの程度を勘案する必要があると述べている。つまり，多くの自己の側面をもっていても，それらが相互に似通っている場合は，重大なストレス事象に対しては緩衝器として機能せず，相互の重なりが少なく質的差異が明確であることが前提条件となると論じられている。本研究で測定されたアイデンティティ相互の調和性が，双方において求められる役割行動の類似性や共通性を多分に反映していることを考えると，今回，アイデンティティ数の効果が認められたのは，日常的ストレスへのレジリエンスを測定したからだとも考えられる。深刻なストレスへのレジリエンスとの関係においては異なる結果が得られるかもしれない。今後の研究では，アイデンティティ相互の関係を調和―不調和の次元だけでなく，同質―異質といった次元からもとらえ，ストレス事象の性質をも考慮した検討が望まれる。

## 本研究の意義と課題

都市社会学では，ワースのアーバニズム論（Wirth, 1938）に代表されるように，都市的環境はそこに暮らす人々の精神的健康を害しやすいなど，否定的側面が論じられることが多い。最近の研究においても，都市住民は精神疾患の罹患率が高く，ストレスに対して脆弱であることが報告されている（e.g., Lederbogen, Kirsch, Haddad, Streit, Tost, Schuch, Wust, Pruessner, Rietschel1, Deuschle, & Meyer-Lindenberg, 2011; Peen, Schoevers, Beekman, & Dekker, 2010)。これに対し，フィッシャー（Fisher, 1975; 1978 奥田・広田訳, 1983）の下位文化理論では，都市の持つ革新性や創造性といった肯定的側面が強調された。都市には多種多様な下位文化が共生しており，それらが相互に交流することによって新しい独創的な文化が生み出されるというのが，この理論の主眼である。本研究は，下位文化理論が主張する都市の性質が個人の精神的健康にどのように影響するかを社会的アイデンティティの多様化という視点から検討した。本研究の結果は，大都市の環境がもたらすであろう社会的アイデンティティの多様化は，個人の精神的健康に対しては諸刃の剣となることを示唆している。すなわち，都市的環境では，さまざまな下位文化集団や社会的ネットワークに同時に所属することが可能になり，個人は多様な社会的アイデンティティをもちうるが，それが常に精神的健康に好ましい影響を与えるわけではない。アイデンティティ相互の関係が調和的であれば，それは，ストレス事象に対する抵抗力としてのレジリエンスを高めるが，反対に，それらが相互に不調和ならば，むしろ，レジリエンスを低めうる。このように，都市的環境と精神的健康の関係における両面性をレジリエンスという側面から明らかにすることができた点に本研究の意義がある。

なお，本研究では，大都市圏の大学生のみを対象としたが，社会的アイデンティティの多様性が相対的に低くなると考えられる地方都市（もしくは非都市部）の大学の学生との比較を行うことにより，本研究の知見の妥当性を検証することも必要であろう。その際には，性別や社会階層も考慮した検討を行い，本研究の知見の一般性を検証する必要もあるだろう。また，すでに述べたように，本研究にはアイデンティティの調和性やレジリエンスの測定方法など方法論上の課題がいくつか残されている。今後はこれらの問題点も改善しながら，都市的環境と精神的健康の関係を解明するための新たな切り口を模索していくことが求められる。

## 注

1．本研究は，大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター2009 年度ドクター研究員プロジェクト（代表　向井有理子）の一

環として実施された。本研究の一部は，日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会で発表されている。本論文で使用したデータは，宮崎・田端・池上（2010）において報告されたデータと一部重複している。

## 引用文献

Baumeister, R. F.（1986）. *Identity: Cultural Change and the Struggle for Self*. Oxford, NY: Oxford University Press.

Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R., & Wethington, E.（1989）. The contagion of stress across multiple roles. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 175-183.

Brook, A. T., Garcia, J., & Fleming, M.（2008）. The effects of multiple identities on psychological well-being. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 1588-1600.

Brown, G. & Rafaeli, E.（2007）. Components of self-complexity as buffers for depressed mood. *Journal of Cognitive Psychotherapy: An International Quarterly*, 21, 308-331.

Coverman, S.（1989）. Role overload, role conflict, and stress: Addressing consequences of multiple role demands. *Social Forces*, 67, 965-982.

土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫（1990）. 多重な役割従事に関する研究：役割従事タイプ，達成感と男性性，女性性の効果　社会心理学研究, 5, 137-145.

Fischer, C. S.（1975）. Toward a subcultural theory of urbanism. *American Journal of Sociology*, 80, 1319-1341.

Fischer, C. S（1978）. On the Marxian challenge to urban sociology. *Comparative Urban Research*, 2-3, 10-19.（奥田道大・広田康生（編訳）1983. 都市の理論のために —— 現代都市社会学の再検討　多賀出版）

Fischer, C. S.（1982）. *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*. Chicago: University of Chicago Press.（松本康・前田尚子（訳）2002. 友人のあいだで暮らす —— 北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク　未來社）

Higgins, E. T.（1987）. Self-discrepancy: A theory relating self to affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至（2003）. 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　心理学研究, 74, 276-281.

岩田紀（1995）. 都会人の心理 —— 環境心理学的考察［増補版］ナカニシヤ出版.

James, W.（1890）. *The Principles of Psychology*（*Vol. 1*）. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Koch, E. J. & Shepperd, J. A.（2004）. Is self-complexity linked to better coping? A review of the literature. *Journal of Personality*, 72, 727-760.

Lederbogen, F., Kirsch, P., Haddad, L., Streit, F., Tost, H., Schuch, P., Wüst, S., Pruessner, J. C., Rietschel1, M., Deuschle, M., & Meyer-Lindenberg, A.（2011）. City living and urban upbringing affect neural social stress processing in humans. *Nature*, 474, 498-501.

Linville, P. W.（1985）. Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.

Linville, P. W.（1987）. Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 663-676.

Masten, A., & Reed, M. G.（2005）. Resilience in development. In C. R. Snyder & S.J. Lopez（Eds.）, *Handbook of Positive Psychology*. New York: Oxford University Press. pp. 74-88.

Mayer, P.（1961）. *Townsmen or Tribesmen: Conservatism and the Process of Urbanization in a South African City*. Cape Town: Oxford University Press.

宮崎弦太・田端拓哉・池上知子（2010）. 友人関係の単一-多重送信性と都市的環境への適応 —— 都市部大学生を対象として　都市文化研究, 12, 77-84.

長尾史英・芝崎美和・山崎晃（2008）. 幼児用レジリエンス尺度の作成　幼年教育研究年報, 30, 33-39.

大谷信介（1995a）. 現代都市住民のパーソナル・ネットワーク —— 北米都市理論の日本的解読 —— ミネルヴァ書房.

大谷信介（1995b）.〈都市的状況〉と友人ネットワーク —— 大都市大学生と地方都市大学生の比較研究　松本康（編著）増殖するパーソナルネットワーク　勁草書房　pp. 131-173.

大谷信介（2007）.〈都市的なるもの〉の社会学 ミネルヴァ書房.

Peen, J., Schoevers, R. A., Beekman, A. T., & Dekker, J.（2010）. The current status of urban-rural differences in psychiatric disorders. *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 121, 84-93.

Rafaeli, E. & Hiller, A.（2010）. Self-complexity: A source of resilience? in J. W. Reich, A. J. Zautra, J. S. Hall（Eds.）, *Handbook of Adult Resilience*. New York: Guilford Press. pp. 171-192.

Rothermund, K. & Meiniger, C.（2004）. Stress-buffering effects of self-complexity: Reduced affective spillover or self-regulatory processes? *Self and Identity*, 3, 263- 281.

榊美知子（2006）. 自己知識の構造が気分不一致効果に及ぼす影響　心理学研究, 77, 217-226.

佐藤徳（1999）. 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について　教育心理学研究, 47, 131-140.

Wirth, L.（1938）. Urbanism as a way of life. *American Journal of Sociology*, 44, 3-24.

Woolfolk, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Allen, L. A., & Polino, M.（1995）. Self-complexity, self-evaluation, and depression: an examination of form and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 1108-1120.

義田俊之・中村知靖（2007）. 抑うつの促進および低減プロセスにおける自動思考の媒介効果　教育心理学研究, 55, 313-324.

# Effects of Multiplicity and Harmoniousness of Social Identities on Psychological Well-Being: An Investigation of College Students in Metropolitan Areas

Takuya TABATA, Yuriko MUKAI, Genta MIYAZAKI, Tomoko IKEGAMI

The urban sociology literature suggests that people living in cities are likely to have multiple identities because there exist various subcultural groups and social networks to which they can freely belong. The present study investigated the effects of multiple identities on psychological well-being on a sample of Japanese college students in metropolitan areas. Prior work demonstrated that having a higher number of identities is associated with greater psychological well-being if the identities are in harmony with each other, but it is associated with lower psychological well-being if the identities are in conflict with each other. However, it remains unclear how and why a higher number of identities leads to greater psychological well-being (or less psychological maladjustment). From the view point of self-complexity theory, we predict that having many identities increases a number of distinctive self-aspects (increases self-complexity) and results in greater resilience against negative events. Self-complexity provides more ways for a person to cope with negative events because it inhibits the spillover from them in one dimension to the rest of the self. This mechanism, however, operates only when the identities do not conflict with each other. 189 undergraduates participated in a questionnaire study. Participants listed as many identities, which are defined as groups to which they belong and their social roles, as possible, and completed scales that measure the importance of each identity and the identity harmony regarding their three principal identities. They then completed subjective well-being and resilience scales. The results indicated that having many rather than few identities leads to greater resilience if the principal identities are in harmony, but leads to lower resilience if they are not in harmony. Neither the number of identities nor the identity harmony affected subjective well-being. This suggests that having multiple identities does not simply enhance feelings of happiness but rather contributes to psychological well-being in a more preventive and indirect manner. The implications and future directions are discussed for the relationship between urbanism and psychological well-being.

Keyword：social identity, self-complexity, subjective well-being, resilience, urban environment